

名・勝・負

第一回戦 對伊丹高於本校校庭（午后三時）

初試合にも拘らず、全員斗志満々伊丹高校を本校校庭に迎え撃ち前半は一点をリードされたが、後半には全員一致團結して反撃に出白井のロングシュートにより同点としその後續いて二点をあげ三對一とリードして敵に打つちやうをくわした。その後タイムアップ寸前敵に一點を許した。併し勝利は本校に歸したのである。

初試合には必ずまけることになつていた母校のあまり芳しくない傳統をうち破り、全校に蹴球部の地位を確乎不動たらしめた。

相手校の選手の體格は完全にわれわれを凌駕し、又豊富な經驗があるにも拘らずわれわれが勝利を治めたのは日頃の練習・全員の團結と闘志によるものであり體力における悪條件と經驗の淺きをカバーをしたものと思う。

特にこの試合において練習・團結・闘志の偉大さを痛切に感じた。又伊丹は屢々不法なチャージを試みたがわれわれが常に堂々とフエヤー・フレイとスポーツマンシップをもつて對抗し得たことはよろこぶべきである。

この試合を通じてわれわれは個人としても部全體としても幾たの教訓をうることができたことを相手校に感謝する。又生徒諸君の絶大なる應援に深く感謝し勝利を治めることができたことを信する、特に藏重・塚本の兩君に對しては感謝に耐えない。

この初試合に特に見るべきものは白井君のロングシュートである。彼のキックはわれわれを勇氣づけると共に蹴球部初めての点として賛めるべきものである。

六甲 3
0-1-1
伊丹 2

GK 重原 白井
FB 藏小宮 塚本
HB 藤塚 松平 高田 (安田)
Fw 藤松 平谷 白井 (谷水) 後半位置者
() より入り

心に残る名勝負

佃 幹夫

35年にも亘る永い監督生活の中には、色々な試合を経験しました。

いずれもが本気の試合でしたから、「どれが名勝負でした」とは言えませんが、私なりに今後の計画や見通しと言うような事もありましたので、それに沿って一歩々々地固めをして行くことが六甲を一流チームに育てるための手段だと考えました。

就任当時は、高校界に神戸高校、関学、兵庫工高らが上位を競っていましたので、当面、それらのチームを破る事の為に我慢強い努力を始めました。

眼前にはだかる強豪、特に神戸高校を破る事は吾チームが将来どのように成長するか、万年一回戦ボーイで終わるか、上位に食い込んで優勝を争うようなチームに育つか、大袈裟に言えば六甲サッカー部の生命に関わる仕事であったのです。

17期・18期の戦うゲームは一戦々々が上位への挑戦権を得るための特別な戦いでありましたし、週2～3度の練習も非常に大切なものでした。

「勝てる」という気持ちを部員全員が持つためには、今までにやったことのない「何か」を経験させなければならなかつたし、他のチーム以上の苦しさに耐えたのだと言う自信を持たさなければならなかつた。実際、そうでなければ強い相手を前にしたときに、気で相手を圧するような力は湧いてこない。「ムード作り」



18期・19期 近畿大会に田辺会長が応援に

の為に大いに根性論を打ち続けたい。

19期生は神戸市新人大会で、揺るぎなき神戸高校の王座を奪い、初優勝を果たしました。18期・19期で近畿大会初出場を成し遂げた自信が繋がった結果ですが、それでも天下の一中を破った試合は六甲にとっては大きな力となりました。同時に中学大会で21期、22期生の活躍で本山中学全盛の神戸市中学サッカー界に新風を吹き込み、優勝。県、三都市、近畿大会と躍進を続けることとなりました。

六甲第三グラウンドのオープニング戦は21期生が初めて勝った、対本山中学決勝戦（昭和35年・秋）でした。恐怖に似た緊張を免れようと、数え数えながら戦った選手もいました。そして連続優勝・本山の連勝を止めた試合でした。

20期台は各々個性的なチームでしたが22・23期は強いチームで色々なタイトルをとりました。ついて26期は期待通り、中高を素晴らしい成績を残しましたが学業が伴わず一番最後の大会に出場出来ませんでした。その後29期が頑張り、30期台にうまく継いでくれました。

29・30期は大変な激戦を勝ち抜き、全国大会に出場。徳島の猛暑の中の2回戦、前年度優勝の静岡代表・浜名高のゲーム。当時の新聞には応援で負けた六甲とありますが、2-1の大接戦で敗退負傷がなければ分からなかった。六甲もここまで出来るのだ。

31・32期で近畿大会優勝。一試合、一試合勝ち進んで行き無欲で決勝へ。京都

名・勝・負



の西京極グラウンドで地元の嵯峨野高校を破って近畿500チームの頂点に立った。伝統の力を見た試合。奇跡的なロングシュートも印象に残るがとにかく総力挙げての勝利に感激。

30期半ばでは34・35期新人戦優勝。39期が県総体での入賞があったものの、めざましい活躍はなかったが、それでも39期の四強リーグでのファイトぶりは相当なものであった。

40期41期は二人の国体選手を生む大活躍をしたが、この期にも乗り越えなければならない壁があったのです。中学時代神戸FCの壁が厚く、このコンプレックスを越えないと高校で頂点に登れないと考えた私は絶対彼等に甘い顔を見せませんでした。チャンス到来。ポートアイランドでの神戸FCとの雨中戦でしたが、とうとう六甲が神戸FCを破ることが出来た一戦。これは私だけが名勝負と考えているのかもしれない名勝負です。

神戸高校や本山中学が目標であったように、永い間には必ず節目のようなものがあって、時代の流れとでも言うのでしょうか、報徳や県芦屋、西宮東、あるいは広陵中学、魚崎中学、神戸FCなどが次々とハードルになりました。

唯、六甲の選手にとって最大の戦いは「自分の心」であったと思っています。

「週二度や三度の練習」現に時間に直せば週五時間弱である。他校に二日分にも満たない時間を他の運動部の連中が感じているように「これでは勝てないよ」と思ってしまうお遊びに終わってしまうのではないのでしょうか。

いつの日か先輩が作り上げた「何か・SOMETHING」。伝統的に伝えられた

六甲、念願の初優勝

1点守り 嵯峨野を制す

近畿高校サッカー

第二十七回近畿高校サッカー選手権大会最終日は、二十九日午前九時から西京極球場で三位決定戦に続き、六甲(兵庫)―嵯峨野(京都)の決勝が行われた。兵庫県大会一位の六甲は後半20分に守田があげた1点を守り切り、強豪嵯峨野の二連勝をはばくことも、念願の初優勝だった。

守田が決めた。成田が高くあげたボールを守田が後衛にシュートしたのだが、このときは嵯峨野の

守備陣は全々の棒立ち。守田はフリーでものせた。試合は前半から嵯峨野ペース。再三六甲ゴールを襲ったが、いずれも最後の詰めを欠いた。六甲がリードしても嵯峨野の猛攻が続いたが、六甲の体を張っての気力

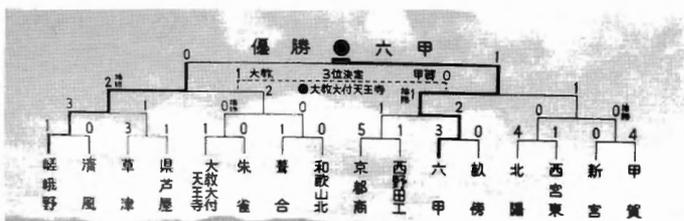
のあるディフェンスもまた見事にとどめて、わずかに1点を守り切った。▽3位決定戦

大教大付(1) 0 0 甲(1) 0 0 (大甲) 0 0 0 0

【物認可】

▽決勝
六甲 1 (100) 0 嵯峨野 (兵庫) 0 (京都)

【六甲】 守田 関 井村 田村 免本 田田 谷
【嵯峨】 木田崎村 川田 藤田 原上 田
【審判】 梅成 大市 細吉 香石 北村 大
▽交代 【六甲】 小宮山 (菅田) 浜
【嵯峨】 小宮山 (菅田) 浜



バックボーンがなければ、中学大会のカップやトロフィーを全部かささらうほどの部にはならなかったし、県大会優勝や近畿大会優勝もあり得なかったのではないのでしょうか。

平成5年3月末日で永年勤めた六甲学院・高等学校サッカー一部顧問を引退することになりました。この間、故ヒルケルさん・故友方茂先生には特にお世話になり、お力添えを頂きました。六蹴会の会長をはじめ諸先輩には、ご協力を心から感謝申し上げますと共に、今後とも旧倍のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

幸い51・52・53期の高校生もよい成績を挙げましたし、54・55期という中学生も市・県大会とも活躍し、好チームを引き継いでもらうことが出来ました。50年の歩みがより大きな稔りに継がっていきますよう。

名・勝・負



29期・30期 兵庫県大会優勝

思い出の名勝負

市川 雄一

六甲に来たのは、34期が高3の時でした。35期は泥などもいましたが人数も少なく、なかなか成績を残すことが出来ませんでした。しかし、39・40期にはいい選手がそろってチャンスが巡ってきました。41・42期は中学生で市民大会、総体を連覇し、その41期が高1に上がった夏の総体では39期から41期のメンバーでチームが生まれ、久々の全国大会出場が期待されました。緒戦の神戸高校以後、順調に勝ち進み、準決勝では現在ガンバ大阪で活躍している和田が率いる御影高校と対戦しました。試合はその和田に決勝点を決められ、0-1で敗れました。いい選手が集まり、私にとっても期待が大きかっただけに忘れることの出来ない試合です。

勝った試合より負けた試合の方が、得るものも多いような気がしますし、印象にも残っています。先に挙げた41・42期のチームも、市民大会でのKFC戦や、総体での高倉戦御原に7-1と大敗した試合です。開会式の後、試合までの長い時間を選手はグラウンドで待たせたため、猛暑の中選手は体力を消耗してしまっていたのでした。私が一番後悔している試合です。

40・41期は、県新人戦で優勝することが出来ました。決勝の伊丹北戦は押しながら0-0の引き分けに終わりましたが、これも壮絶な、凄い試合でした。

今年の春からは佃先生が退かれましたが、今後も色々な試みをしていきたいと考えています。いい素材もそろっており、卒業生の期待に応えられる強いチームを目指しています。



昭和46年度 全国高校総合体育大会 サッカー大会（於：徳島県）対 浜名高校



昭和46年度 全国高校総合体育大会 サッカー大会（於：徳島県）対 浜名高校

名・勝・負



六甲VS伊丹北で

決戦

県高校新人サッカー

大詰めを迎えた兵庫県高校新人サッカー大会兼近畿高校選手権県予選(神戸新聞社後援)第五日は二十七日、神戸中央、磯上両球技場で準決勝、敗者戦(5位決定1回戦)の計4試合が行われた。準決勝では六甲が九年ぶり四度目、伊丹北が二年連続二度目の決勝進出を決めた。敗者戦では御影工、

神戸が勝ち、近畿大会出場へ残る一つの座を争うことになった。

▽準決勝

六甲 3 (110) 2小野

伊丹北 1 (010) 0御影

▽5位決定戦1回戦

神戸 3 (210) 0明石北

御影工 2 (110) 1北須磨



41期 高倉中を破り、総体優勝